



朝夷巡島記第八編 五



13
704
40



門進 70子 卷 40



明治三十八年 十月九日

ウエブストル
スベルリング 獨學 一冊 日本書記 神代卷 行假名付 小本二冊

第1ビント代
第1リートル 獨學 一冊 藤高文先生著 自初編至四編各五冊定 彩色八

官田先生著
皇朝戰畧編 八冊 道讓先生著 彩色八 全七冊

學校專用改点
小學素讀本 二冊 漢學之部 横文字 獨替古 折本 全冊

森先生著
洋算学 二冊 森先生著 石山洋美術園 全冊

發兌書肆 前川源七郎 梓

大阪心齋橋 北久寶寺町南入

朝夷巡島記全傳第八編卷之五

東都 松亭金水編次

續輯第十九 身と撮て節とをん佳人の情 残毒忽地報ふ家族が最期

秋の九月下浣夕の風の身不ぞ染む。川を不生一若茅の花の場をさうさうと
 茶をまじ尾花霏とまじ雪うと返る。笹媛の舞児の翠麻呂とわかれ抱きあひ
 淵へ身と没れんと岸をさうさうと此処と呻吟の傍とくんと石不て刻める
 地をさうさうと経る若生を臺坐後光の胸損とらう。何者う著せむの比
 けんの菅の小笠も今のや。雨不腐ちん破羅と骨の速るの木枯れ吹
 荒ささし蜘蛛の巣も冬の山田小獨ら。破まじ案山子不彷彿ら。媛の作を
 額著る六道能化と夕えら。地藏井の尊さの川をの凡不吹曝と雨の

降る日雪の夜も身軀彰りしちりぬの衆生済度のるさうや。その世の夢の
 仮の宿今宵不迫に就し子後の世助けり。傳へて推さりの罪業
 浅き故とりて親と俱あへるやうぞ。賽のこみ集まらん井の教化と受り
 とて。こもる。滅のこもる。穢きのの後世とて。偏不憑こまらぬ。操りし
 愚痴の負ゆる初夜の近づき。尚董次多う性方と探し。あて會ひ死
 後志志え得遂ぬの。息ある中の恥辱へ慈愛悔し。世に在る程の心
 ありり。今更何といはん。一刻も汚湛ばまと思ひあり。と弱る心で自
 勵し。岸不生る柳蔭小暗さ方ふらう。南無阿弥陀仏。弥陀仏唱へ
 めんば身と流ら。尚春水へ逆しまふ。飛入らん。裾曳捉へま。後援
 君と声かけら。是れ。宮小四郎が追手を。心周章て振ふ。と再び
 入らんと踏む。斤足。その間不堅と抱き。媛の在る。おれぬ思ひ

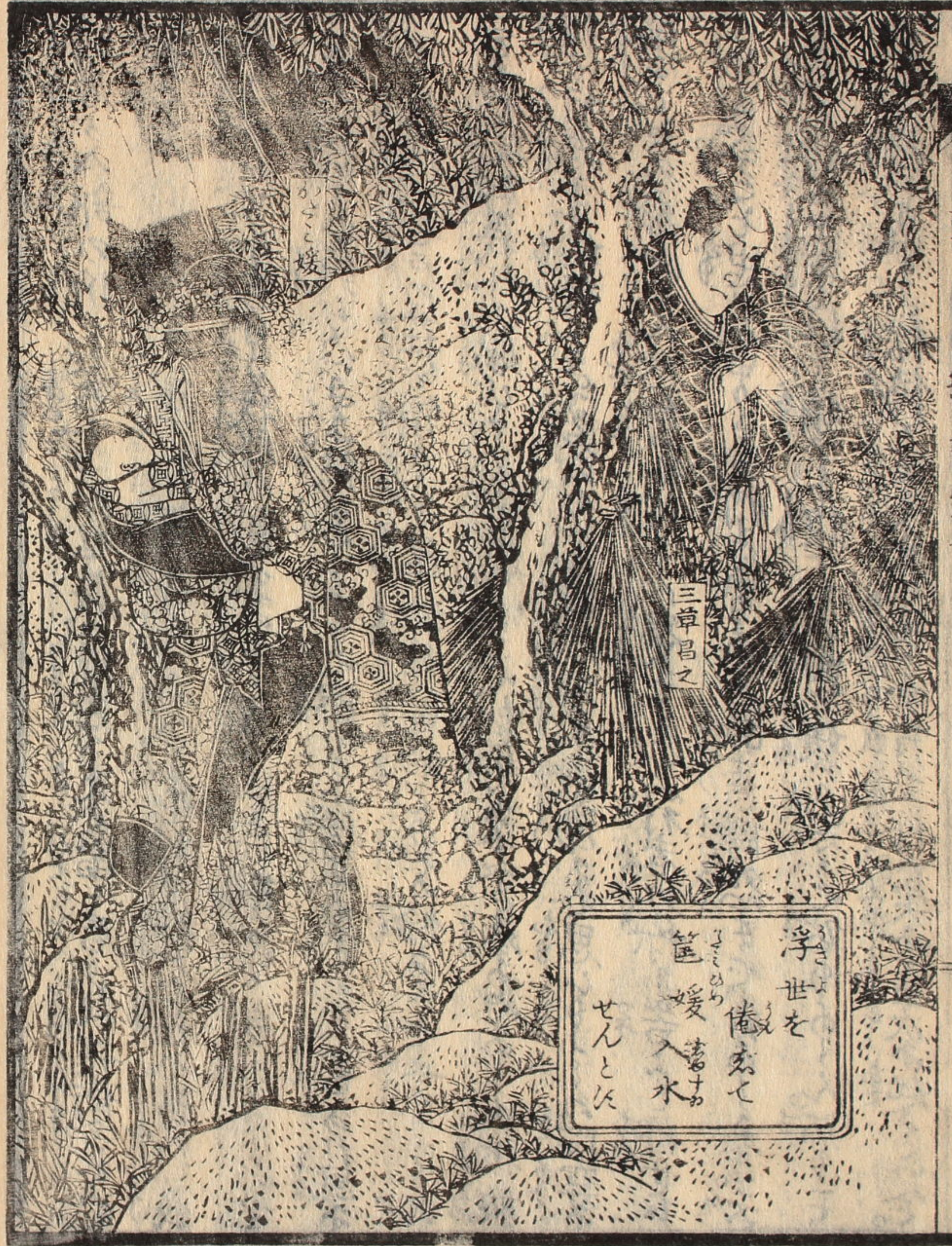
何者あまの妨るす。す処離さずやと抱苗さる。手と拂はんを力と。究
 むるりの。女の鐵弱さ。何卒離してと。喃と叫ぶ声。又胸震へ人の心
 地のあるるべ。當下件の抱苗さる。雄子のやと。声とあり。駭きあへる媛
 君。在下と。三草太郎五昌之。おてい。と言ふ。と。屢る。と。開先
 緩言。おげん。奈何ある。所へ身と沈めん。と。あぞ。死。且。易け
 ま。早。後。の。悔。ら。ん。や。と。い。ま。駭。く。筐。媛。さ。も。そ。方。の。太。郎。五。の。
 思ひ。ゆ。み。を。此。処。へ。来。て。吾。併。と。苗。む。不。側。さ。決。て。の。こ。逸。早。く。謙。余。ま
 ち。肉。を。か。と。問。ま。て。此。方。の。意。得。は。何。等。の。條。う。夢。ふ。ご。存。せ。し。う。の。い。を。
 ま。ぐ。此。方。を。向。む。と。手。と。放。し。傍。不。蹲。踞。拵。在。下。ま。の。所。へ。参。り。ま。さ。家
 仔細。の。陸。奥。磐。城。不。争。論。あり。その。換。断。の。乃。ふ。と。と。朝。夷。三。郎。義。秀。ぬ。
 鎌倉を發足あり。既小太の傍と退らま。舊友の情忘ま。石戸太田の

向莊と訪ま欲しと思せども。這田の君の命小より。下まらるまば私小他
 と訊む時ふび。因て城戸武詮と大田の莊へ遣まると光仲の安不口と
 訪ま在下とて吉見の起居と尋問せよとある作小よりて兩人の昨日途
 めをさち別ま既小の地へ入すうと。案内のちぬ武光野の尾花原小路
 ふく差ひあまぬ方と呻吟て。漸と此処へ来すうと。秋の日蔭のさうげ多く全
 く暮て東西の分ちのあうび荒屋の枡火の影と目的を石戸の莊と
 ぶ。川の川副と瀬す所小穉兒懐き女あり。定めて當所の人ららん。彼
 小向んと近づきて言葉とからん。南无阿弥陀佛と唱ふる言音と
 媛のほ声小く日似たりと存まるとか。この思ひゆきすこまの怪しき風情
 する向でもあつた。この川へ身と沈めんと呻吟う。何方の誰とわづねのま
 若き女子の身殊小抱き穉兒と。兩個が命捨小来す。條こそあまぬわづね

女子の心隘く。妻夫喧嘩いささ。身小逼りて身と逼つ。世間小忒許すあ
 くと。若然らんあ不便のあとい。老波心まう。且の留めん遣んと
 抱き苗一の媛君と思ひゆき。穉兒の秋思時の身あつて。解さん死んと
 覚悟あま。一朝のこま。その條奈何媛君頼と作せし。と詞遠
 多く向けらま。媛の悲し。ま面目あま。作らま。滝とら。数行の涙のこま
 あを。この時や。顔と挙げ。眼と屢と。まの程の容子逸く物ごり。任意
 良人小捨らま。その身と穢し。我の。先立あ。父さ。天の恥とあり。人び生み
 ちあ。この身と。小捐名と。潔と。せん。の。猶主従の縁。さ。尺。今盤小
 逢て。このこと。言遺す。歡さ。若も。この後。符者。刀。称。小廻り。あ。八日。の。あ。ま
 ら。委。是。と。告。給。へ。人。へ。ま。ま。の。ま。朝夷。あ。の。年。来。日。未。休
 恩義と。稟。あ。の。身。の。薄。命。小。報。へ。と。時。節。も。あ。を。仇。小。散。る。深。山。の。松。木。れ

あつて錦と飾る秋ぞふさ哀まらる身の果と想係やくらり小懐小
 在る禪児の願ふ顔とあやて歎き小沈む理と実小いと想ひあはくは
 けりの中しふあふぬりのうづまふ小争う媛と死すをがる界小必會の皇天とれ
 扶けよと宣ふあふんと改めその山歎き且はまの山此と獨て潔き名と遺
 さんと思すて逸くその理頭然あて源廷尉の媛君と誰くをまて称せざん然
 はる在下囚らすばもこあて見えあすまは命と助るのう 離れ日報り時
 かん 行者の山心奈何とも知るがけまどま修小隱まあふ小血郎を深き巧
 こと推量り并と避んとのてあやあふんま媛君と若君の山命馬と追ひの直次
 無體のうらり起るまどま果多る在下身小把ての山の仇生々べき校者
 ろふん今宵かの家へ溜込で塵小あふままこの昌之の腹の医と媛君案内
 ああれ形のこいそ例のま血乳小早る鳥濟と呵まのん然小あふん先頃

行者が入部の折々宮小西郎弘義へ嫌念小来て溜る居り執権衙かへん
 屢々つらつら小入あり當下朝夷義秀大人ことと訝り石戸の荘の當時義
 眞う所然小言見義邦が新小のまとあつてまの假人つらあ要用のや
 とも入部のこと計らふま然あふつと密やう小馬小あふこと不審あれ思小
 笑く先達て石戸の荘と領さんと屢執権へ賄賂どもその條あくと止りて
 こまの這回義邦小賜ひつらと遺憾あふ愁新あふまああやあふん彼執
 権が奸悪する始終まことあはれ義邦元来暖湯を思ひつら小陥棄小
 陥るとれのありやせん汝石戸小住ら小密小まこと行者刃折小告よと作せし
 らひゆ今こ思ひ當りて何ま小のあま故主の離れ心まことあふん然もこ
 来玉来媛君案内と頻る小促すその面と媛小入りて然もあふん然もこ
 あまと思へども信偽と定らふせん妾が今宵の二件は実小重次小起さつて



浮世を
 倦るて
 籠入水
 せんとい

三草昌之

三草昌之

渠が母を斧木の程にして種の恵と栗ともあり。その報いご不得せ
 ば一家を殫り殺さん罪いと深き所あり。その人董次秋弘の命お
 及ぶの悪行のせ。吾侪お迫り又り威は憎し然る。実お殺すの心お
 あらねば。その罪の猶軽くん吾侪が小命を殫ら身お忍びるが秋のあらん。
 任意のも死らうも。渠と敵といへず。そ方の何と思ふぞ。とて太郎五
 昌の眼と怒らし牙と唾と甲斐あるとと宜小のる斧木とやるが日未
 の甫も。媛君とりと折らすり家の新婦あるとも。誠の心なるとも。
 董次の罪の方死小當まり。争う敵といへずと恐さともいへど。媛が宜ふのり
 小理不似く理あらんとも婦人の仁との曾多きもも。猛夫うまらはり斧木はひ
 多人後小方一義不あらずと行者刀称ままと朝夷の六人おさまと外口めらるる當下
 件の分解をていく不義と定まるる腹と壁くのる沸立胸の遣方なり

左右ま同小夜や更るんご頃と立ある折の傍の藪蔭より顯れ出る
 八人手小棒と麻繩と三條持のあり。女子の足を初早。遠くの彼と
 脊戸廻り林竹藪稲塚を推頭探し時刻伸び所詮今宵の画簾旁
 と思ひあらる若大爺黄金の十箱も墮すとも小眼逆とも自辛もらるる吾們
 ちの言りを先小主人の大駭動悔ともかりと捨てもあらずといふとも遠くと
 隊旗を隠し川の柳影定られるとも追すると媛が後とり後く難
 人媛の嗟やと身を遠巡農民の族とも物もいえを追ぐ所小三草太郎五
 ち塞り尾終るる農民們你が乃主君小も存し地取の内室を
 途へんとあらる程の式あらると然らるて燈火もある棒と繩這の誰人指指
 揮せ。頃退くずの逸とも首捨切て並んとも勇者の羽小雜人の何と回答も
 あらるるの土不汚とも吾們の緯釈さる小辨へを見とも懷とる若とも女子の

吟呻あつて引傳し。疾く連て来上り。勞資の何ぞり心共へる。邑の歩吏
觸ふ。この邂逅の錢設けにぬ損と申して。催し集り燈火のあつて
却て此方の目標ありに便する。と態と炬火の携へをこの吾に
巧夫の。此他何の思案もあぬ。下郎が罪ハ赦さす。最初地臥の内室
と知るもの。争ふ。勞資不心と掛ん。この怪け。と答ふ。太郎五昌之推
かへ。かへ。あなたその罪を。歩吏を以て觸させ。何方の誰ぞ疾く
詰り。向きて。そまこと。宮刀称の若大爺。董次刀称。あつて。点取
あつて。我内室の供へ。董次が方小到る。頓先達て案内とせ。このまを
各立あがり。開いと。易さ。ふと。是より。路遠う。此方へ来ませ。と先
小玉細。他ひ。步行ふ。三草へ。媛を扶け。曳。性。と。数町あ。ふ。此方早く
も。秋弘が。耳小。え。て。筐媛。隠。生。川。小。呻。吟。と。也。自。身。の。ま。を。伴。へ。ん。と。奴。僕。も

一個兩個とめて。炬火より照らす。徑路と喘を走来る。媛をよす。中なる。董次
秋弘との。太郎五昌之。波より速く。董次が。前より塞り。汝の。宮董次
我へ。往昔。見。行者。義邦の。臣。今。の。朝夷。義秀。小。附。屬。する。三草
太郎五昌之。の。返。す。と。い。ふ。の。詮。あ。り。今。も。汝。筐媛。不。無。疑。の。乘。乗。難
顔を。い。ふ。より。進。退。谷。より。媛。の。家。と。思。ひ。出。命。と。捨。ん。と。い。ふ。所。へ
折。り。く。あ。り。て。杖。け。の。媛。の。也。成。小。恙。あり。と。と。初。ま。を。媛。と。苦。し。ま。さ。む。の。ん
脱。す。汝。が。所。業。小。出。り。我。故。主。の。と。あ。ふ。その。怨。と。復。さん。と。汝。が。家。小
性。ん。と。す。と。汝。早。く。も。こ。小。来。て。必。會。さ。う。の。物。怪。の。傲。倖。乞。我。と。勝負
せよ。との。ひ。の。果。ぬ。小。腰。刀。す。と。こ。杖。と。向。つ。て。董。次。秋。弘。の。ひ。の。よう。ん。
情。と。さ。る。今。も。遁。を。隠。し。ん。と。あ。り。心。裡。の。十二。分。の。怖。ま。あ。れ。の
詮。方。も。胸。を。定。め。て。答。へ。り。守。者。小。捨。ら。し。便。溺。る。身。を。疾。く。の。不

朝夷八編卷之五

便びん。若わ。心こころ。小こ。熊くま。あべ。の。後ご。見み。守まも。り。石いし。戸ど。の。荘しやう。小こ。安あん。堵と。す。性せう。
 未ま。ま。を。計か。ら。ん。と。好この。意い。と。必かな。ず。落お。ち。ひ。と。雅えん。頭だう。あり。と。謂い。ふ。但た。し。の。り。
 兼か。し。も。ぬ。條じやう。あ。る。あ。ま。ま。を。あ。る。と。家いへ。と。抜ぬ。け。死し。ん。と。す。ぬ。媛ひめ。が。血ち。迷ま。ふ。不ふ。小。
 志し。を。我われ。の。一ひと。向むか。ひ。と。向むか。ひ。と。ま。を。ま。を。汝なんぢ。に。言い。ふ。と。僻ひく。耳みみ。小こ。安あん。堵と。す。と。故こ。主しゆ。の。為ため。小こ。怨えん。え。
 へ。ぬ。狂くる。人ひと。の。狼らう。藉せき。を。さ。し。の。媛ひめ。が。疾やく。より。の。私し。夫ふ。小こ。安あん。堵と。す。と。意い。得とく。か。り。と。い。え。せ。も。敢あ。
 を。昌まさ。之の。身み。と。追お。ひ。ま。ん。と。て。左ひだり。右みぎ。と。い。ひ。と。誰たれ。の。誠まこと。と。守まも。り。汝なんぢ。が。今いま。も。如ごと。く。多おほ。く。何なに。と。
 悔く。し。と。媛ひめ。の。再また。が。此こゝ。と。捨す。れ。小こ。安あん。堵と。す。ぬ。人ひと。也なり。畢ひつ。竟けい。已い。が。非ひ。と。僻ひく。り。他た。と。思おも。ふ。す。る。を。
 一ひと。言い。詞じ。戦せん。ひ。益えき。あり。初はつ。技ぎ。放はな。す。紐ひも。劔けん。汝なんぢ。と。戮ころ。す。我われ。死し。す。る。兩りゆう。箇かん。を。も。と。
 究きう。め。む。ぬ。元もと。の。鞘さや。へ。収お。め。じ。然しか。し。も。口くち。の。根ね。横よこ。裂さ。れ。小こ。安あん。堵と。す。ぬ。と。電でん。光くわう。の。見み。く。
 一ひと。と。又また。と。聲こゑ。一ひと。と。打うち。込こ。め。今いま。の。猶なほ。條じやう。あり。あ。ら。ば。と。董とう。次じ。の。刀やいば。ぬ。と。合あ。せ。設せ。
 矢や。と。と。雲うん。の。が。と。右みぎ。へ。下くだ。り。左ひだり。へ。外とち。へ。虎こ。乱らん。青せい。眼がん。上じやう。段だん。下げ。段だん。挑てう。と。我われ。の。景けい。像ざう。と。

ミ。雑ざつ。人にん。の。心こころ。の。膽たん。の。心こころ。の。消け。え。る。不ふ。忍にん。ま。燃も。え。る。と。炬くわ。火か。小こ。安あん。堵と。す。ぬ。者もの。を。
 て。抛な。り。せ。し。と。枯こ。葉は。と。と。逃に。散さん。す。と。明あ。き。火か。影かげ。と。暴あつ。小こ。雲うん。と。其その。の。暗くら。
 又また。の。光ひかり。と。目め。的てき。と。東あづま。風かぜ。西にし。風かぜ。大おほ。刀やいば。と。受う。損そん。し。董とう。次じ。の。肩かた。先さき。
 五ご。六ろく。寸すん。の。腕うで。弛ゆる。み。嗟あは。れ。と。叫こゑ。び。と。撞つ。と。伏ふ。せ。と。導ま。り。昌まさ。之の。足あし。踏ふ。れ。
 微こ。塵ちん。と。ま。り。と。ち。返かへ。り。刀やいば。小こ。安あん。堵と。す。ぬ。中なか。で。と。り。放はな。す。と。董とう。次じ。の。衣え。と。と。秋あき。
 弘ひろ。い。の。ち。も。平ひら。以もつ。死し。で。り。か。る。折をり。と。雑ざつ。人にん。の。孩こゝろ。と。飯いひ。の。箇かん。様さま。と。の。知し。る。者もの。不ふ。
 人ひと。と。ち。驚おど。り。折をり。の。修しゆ。驗げん。酷こく。残ざん。の。か。と。も。あ。る。と。昨きのう。日ひ。の。謝あや。禮れい。且かつ。之の。尾び。
 と。索もと。め。んと。来き。り。と。こ。の。閑いひ。室むろ。小こ。酒さけ。宴えん。と。ま。り。あ。る。と。と。在あ。り。合あ。せ。る。酒さけ。散さん。
 小こ。い。と。う。碎くだ。れ。と。催もよほ。す。と。暮くれ。れ。あ。ら。び。筐か。媛ひめ。竹たけ。方かた。性せう。と。ん。見み。ん。と。ん。と。家いへ。内うち。
 の。男おとこ。女めづめ。と。ち。噪さわ。ぶ。中なか。の。董とう。次じ。秋あき。弘ひろ。い。雑ざつ。人にん。の。呼よ。び。聲こゑ。も。左ひだり。せ。よ。右みぎ。せ。よ。
 と。指さし。揮な。り。と。行ゆ。方かた。と。探たづ。ね。索もと。め。と。と。白しろ。毛げ。の。火ひ。と。拂ふ。ふ。ぬ。く。と。喧わ。す。と。く。

頃程不這の怪々々々然のあまを内の間小住方の知まん。と猶縁を
 あふらの注進开の何奴ぞ一大事と。小四郎弘義とらあふ。力あつ把り並
 出んとするとき。斧木の要時と注め。雜人們も周章惑ひて。そのいふ所定
 ぬねど。媛が由縁の人々て。然も拒むの中。小若人えあ。た奴も。おどろき
 示ふするあふ。不憶返あふ。人数多おて。往ぬ人。と甲申末。と乙未。と小
 四郎刀祢の心を。猛く。在せ老年あり。你達傍の。厨副。て。過る。た。針
 らんよ。と狂気の如く。立まへる。こと。と。人。おける。酷残。も。己。弓。矢。を。執。る。此。あ。ま
 ねど。義。と。ん。を。為。さ。る。の。勇。多。俱。小。住。人。と。締。在。は。等。小。狭。め。る。一。刀。あり。を。貸
 めんと。傍。あ。る。刀。一。腰。借。う。け。て。人。ま。は。長。押。お。う。け。る。薙。刀。こ。も。屈。竟。の。の。の。と。七
 あま。と。外。と。そ。と。と。引。把。り。是。が。あ。ま。は。僻。者。の。首。薙。落。す。て。白。田。の。崑
 崙。瓜。を。伐。り。易。し。と。誇。り。う。小。勇。と。な。る。義。勢。小。曳。と。農。民。們。も。嘔。吐。こ。と。

罵り立て引割り。弘義の。董次が。牙の。人。氣。遣。し。る。胸。の。と。の。踏。り
 とも。足。の。猶。ひ。ら。所。と。踏。む。息。切。心。昏。迷。し。故。も。あ。ま。弱。り。う。
 氣。と。勵。り。て。十。町。不。効。隠。し。川。を。不。近。づ。け。如。法。暗。夜。の。何。方。ぞ。と。人。あ。り
 方。も。こ。ん。え。う。ろ。も。要。時。為。湛。す。の。も。あ。ま。合。ふ。又。の。音。は。え。嗟。と。叫。び。て
 倒。す。て。あ。ま。見。の。声。と。弘。義。の。あ。ま。あ。ま。あ。ま。炬。火。と。自。身。持。り。馳。せ。あ
 ころ。ふ。委。慙。あ。る。あ。ま。秋。弘。の。肩。先。册。中。所。放。す。と。般。小。漆。と。景。勢。小。右。又
 是。の。向。ひ。お。漸。ま。る。壯。士。の。己。が。子。の。敵。を。処。動。く。と。詰。候。て。宮。小。四。郎。弘。義
 だ。恨。の。又。と。請。上。と。い。ひ。引。拔。く。氷。の。又。意。ゆ。り。と。三。草。昌。之。血。の。振。て
 ち。ら。ひ。年。こ。も。の。老。と。弘。義。も。腕。小。若。人。え。の。あ。ま。あ。ま。得。昌。之。猛。と。も。
 左右。あ。り。下。風。不。立。は。後。不。引。割。し。修。道。院。僅。不。敵。二。個。の。青。春。何。条。と。あ。あ
 べ。と。者。共。砂。と。搥。相。と。眼。潰。し。ふ。ら。挂。上。と。指。揮。す。る。薙。刀。の。鞘。と。外。と。あ

揪之淀の川流の水車鳴戸の潮八丈ありとある黒汐の渦巻く縛と
 廻るくかると昌之へ信と白眼女へ誰と宮が无道と佐々枝者世ふ二ツと
 ある法師首と昌之把きて後悔すると飛鳥の翔り陽炎稲妻と祭頭
 はは彼処の隠と争ふとや半响可當下宮弘義の渾血不救箇所の瘡
 負て心神疲れ撞と坐し刀と杖の息次居る酷残の程後まのやらば薙
 刀左右不晃り。躍りかゝる昌之の二上二下不請流し刀逆手不薙刀の濟
 形幾矢とち返せぬ。酷残堪へば薙刀と反落さると心悸と拾ひ
 へ俯く所と昌之透さず手と伸べ右の腕と丁と研る切らざる
 酷残猶肺まず拾ふ長刀晃り足と撞る飛騰り上る撲ば死と平め
 諸も不空と拂はせ思ひ返る肌腹と両段ふるまると切筋む太刀不
 得最初の右手の疵疼むのと滴る血も不不。粘る肘の自在とぬが

請損と肚と切放ととて倒る卻舎送る血の巖角不せうまて落る滝の
 大腸小腸痲口より流ま出つ作及物といへば死ぐりり。夫殊
 残が死おむる。自業自得とらひのべ一役小角が流まを汲と有髪る
 が不僧行と保つて必て優婆塞とらひ孔雀明王の經と誦。國家の
 小太平と祈念するべき職不在り。かの雲不素り空と翔る外法の法と
 宮弘義が賄賂の黄金不惑ひて邪な不典。幻術とて人々瞑
 身。火坑不墮さんとす。その罪忽地身不報。及の精とありぬと実皇
 天の邪惡と罰をその勝の人も猶然り。是等と必て闕する人の勸懲といふ
 のあり。于茲芥木の弘義せん。いふとありその子ある。董次の敢て音
 信あり。今ハハしく按ト苦し。いふと不出つ右祝左祝とど一向容子の如
 一人遺りて千万の物思ひとてあらん。その場ふと音を

づみ如く呻吟あり。厨福小居と炊女と一人遺る小奴とと假して路の
 路路修ひと散不逢の火氣と目的と。走りてす処へ近づけり。嗟言
 慙やみ弘義の刀と杖不俯て息の有と無と分らぬ小董次の何れと
 けん般不深々倒とる。修道院踏残の作反死してあり。るるぞ這へ
 如何かと思ふ。弘義が傍不修。今も聊息ある。谷子耳の音を
 口と傍せ。芥木不ゆり小四郎刀拵心定り不持の女とともあま良人と子と殺
 ささこころ。當の敵匡媛と諸共討て怨とを報うべし。然とも彼奴の何方
 へ隠と又思ひらん出ぬくと大声不呼する声と。三草曰く之忽然と
 出て汝と。弘義が渾家芥木よ。今も此違ふ一面の交りみけ。思
 ひ多。恨とあねと故主討者刀拵夫婦と種々不陥と。とば捨不ぬ。ぬ業
 その人の乃小恨と假すの。そは是もめて腹の医ぬ死骸の汝不呉んぞ。

追善供養の勝手ふるせ。とばて芥木の小四郎が突る刀と扱たりん。
 汝が為小良人弘義子の秋弘も殺さる。追善供養の汝のぞと
 匡媛との首刎て供する他いあるうら。覚悟あるせよと怒りの面色血刀
 振て。對る三草の呵らち笑ひ罪ありて。父子の奴等誅せ。とるを
 仇と報りんと。僻する。汝女あ。俱小三途の了連と做さへ。易
 ところ。喜盛の殺生刀の標とと助くる命と捐不来る。火氣と暮る夏
 の虫思ある所為せんより。疾と帰る亡者の後世。弥陀観音と憑む。播
 どと朝ら。程急ら。芥木は。小回答。あ。纖弱女子の疑る一念
 乱と。髪の逆と。裾を返と。夜半の風炬火の光りも絶と。小暗た
 方不。媛と。癖の。死りの媛。渠と。ひさ。紅
 芥木と昌之。把て。引居と。潜り。扱。揮。双。ち。穰。ん。と。

谷合肩先破羅離と切裂きと嗟と叫びて倒るる谷木三草の入りて遠奴
 と扶けて遣んとさひひもその胸の罪のその胸責み双小かろぞ不便なる然
 るの云救の苦とて母へよりハ一撃ふと刀振あけまかると媛の要めとわ
 狂め瘡負の傍へ近よると苦と息と不と吻て瘡負の首とうち擡げ
 物いひとけある景勢なり

初て非と悟る懺悔物語

續輯第二十 奸計再三到る程谷の驛

當下媛の谷木が傍ふ到りてやと声とあげ瘡負よ心と定ふ持と一
 言いふとあり吾們あの因縁とて何の地ふ安堵せば遠般に究めて安
 うんと思ふ同もく冠者刀柄が身と隠るる事とてふより任成許の物と心
 死ぬべく歎くより董次が勢を聴く耳と右流左けまとも辱めあるあ後の崇

の護庇影不然もく會釈との座とへ海一あぐるも思ふ所伶涼世の
 憑とふる死ぬ死す不倍とやと胸と定めく黄昏不迷ひ出ツ呻吟て既
 不死るんとする時とてある太郎五昌之不端もく逢て互の作天と云と縁
 故と語まの渠の怒ま不倍はあん身が親子と怨まん早とて理さるる
 と人未うし始めより心裡いさあやあんが驚らみ抱不孩児との安と産
 落るるその恵と今と忘るる人さるるすこの身不恙る死とりの知心と復さず
 のまふこの地と退てまご後不詮方あくと留むる端ふこの胸が探を
 難人等手籠ふせんとする故不昌之怒りて渠をも懲るあんが家ふゆれ
 向いんとする所へ近来る董次折とて善けとてうらり合刺刺の跡とるま
 未も弘義及二人の修段とてまも敢あく死とる心地とてまもるる罪業が猶
 倍らるると事の悔む折あんが来る字人積らば渠のいふも助けよと呉と

して在りて追ぬる今さる跡へ返らぬる深癪然も死と一家を
 殺す非道と恨もせん。恨思せよとんさる。涙不噀る喘濁声。芥木はれ
 掉あげておよと生とく活るの。皮と惜まらるのやある。況て一家と穢不
 るるむけを恨もあ。九世の換るとも。仇とらるるさ答あまど畢竟父
 子利不惑ひ義と忘るとる天罰と今盤不思ひ當りたり。常言ふ
 り如く人と咒咀が穴ニと。喻不洩を吾們が。巧この柄の誑語此不及
 めるこの災難争う人とむむむと。喃媛う人よせり石戸の莊の縁より良
 人ぞ望とと慈とる土地然ると這回吉見刀称不賜りたりと。笑すの。其
 まさ如何あるは計らひ。と夜と日不嗣て北條刀称の。山鉾へ注てその
 怨とらり。小莊園へ執権と不も言不任せ。這回吉見不場いごと。彼人の
 故範頼の嫡子とては連枝あり。後と害不る條あま。汝苦内の使術と

りて。彼人とも失るり。石戸の莊と賜りんと。仔細あじと密に宣ふと
 弘義の一日も早く計らんと。思へと更小便溺あり。竹塚ある。修道院の昔りて
 怨あり。渠不流らひ咒咀せん。と較多の黄金と賄賂て。憑め異儀多。誘ひ
 符者う住る。床下へ秘符と埋め。彌伏と做さんと。子不塗ゆらん。衣
 因て熊虎の魔神と廻り。隠と川老失るんと。符甲斐當り。符者
 はその身と隠さる。然までも。在男子あり。是も俱不計らんと。す。物あま。子の秋
 媛が羈の。孩児と此うへ。逸早く媛が心と解と。と。吾們が計
 らひて。董次不媛と挑ませ。の。渠が顔ひと。協へ。この件。の。莊園と奪らん。す。
 計略の。差ひと。景勢。他より。来まる。災害あり。自業自得の。今盤。善
 艱あ。ま。と。人。と。並る。血。志。不。俱。不。吻。く。息。由。汝。才。不。弱。す。断。未。廢。媛。



件の物ものもどもととびび毎毎胸胸潰潰且且或或ひひ孩孩をを怖怖ししとと心心神神寒寒心心地地とと
憎憎ささもも憎憎しし然然るる四四重重五五逆逆のの罪罪科科のの懺懺悔悔のの心心消消ささすすとと言言ふふ
木木ももかかるる故故とといいふふ不不問問語語のの身身のの悪悪みみのの後後一一向向恨恨ままししとといいふふ
ああららんんとと思思ふふいいとと不不便便ささ不不掌掌とと合合しし伏伏拜拜とと西西方方浄浄土土のの阿阿彌彌陀陀佛佛供供
世世ののかかるる非非業業とともも引引接接あありりてて救救へへしし願願以以此此功功徳徳普普及及於於一一切切自自他他平平
等等とと念念ままささるる涙涙ああららるるのの回回向向文文三三草草太太郎郎五五昌昌之之也也俱俱不不ららししるる此此のの
罪罪とと倍倍礼礼てて死死ぬぬのの潔潔しし人人のの形形不不死死んんとといいふふそのそののの人人とといいふふ聖聖のの格格宜宜
ああららるるとと血血刀刀拭拭ひひ靴靴不不収収めめ今今のの女女子子がが物物語語北北條條刀刀拵拵がが形形ままたた不不信信
所所以以分分ふふとといいふふ行行者者のの疾疾よりよりそのそのとといいふふ序序のの序序不不信信とと隠隠ひひ
ああららんん右右のの左左のの地地不不在在ささのの後後のの災災害害ををおおももいいててのの序序不不信信とと隠隠ひひ
以以朝朝夷夷大大人人とといいふふとといいふふ磐磐城城へへ来来るる苦苦ああららるるがが危危急急のの場場不不信信とと隠隠ひひ媛媛君君

のの安安居居とといいふふとといいふふ彼彼処処にに居居るるやや城城戸戸四四郎郎武武詮詮のの使使とといいふふ太太田田へへ来来りりぬぬ
ささままららしし今今よりよりのの供供ああららるる太太田田へへ往往けけ光光仲仲ぬぬ在在ささのの俱俱不不高高級級のの後後のの行行らら
いいんん心心奈奈何何とといいふふ蓬蓬媛媛向向ままににををまましし不不信信細細いいとといいふふ馬馬飼飼標標吉吉がが朝朝夷夷大大人人不不
告告んんとといいふふのの地地をを死死行行ししががのの大大人人のの名名をを陸陸奥奥へへ首首途途のの跡跡ををままししとといいふふ不不信信とと隠隠ひひ
来来てて憶憶ひひももののぬぬるる大大多多吾吾侪侪のの往往方方ををままししとといいふふ途途方方をを迷迷いいててのの奈奈何何
不不甘甘ままししとといいふふとといいふふ昌昌之之右右左左のの思思案案もも著著しし手手とと拵拵とといいふふ折折るる喘喘とといいふふ
ののとと誰誰とといいふふとといいふふ嗣嗣忠忠ありり番番ふふ兩兩個個がが傍傍にに蹲蹲踞踞しし昨昨夜夜漸漸とといいふふ交交のの刻刻
頃頃様様念念入入到到りり著著きき和和田田殿殿へへ来来りり朝朝夷夷大大人人にに如如此此とといいふふ昨昨日日のの地地をを
發發足足ありり磐磐城城下下りりああららししとといいふふ望望とといいふふ失失ひひりり一一先先とといいふふ媛媛君君不不告告りり釋釋とといいふふ計計
ららんんとと今今朝朝もも彼彼処処にに居居るるがが心心急急まましし樹樹のの根根不不踏踏きき凡凡とといいふふ不不信信とと隠隠ひひ
心心のの外外不不道道問問りり傳傳へへとといいふふ人人のの居居るる處處をを危危漏漏不不踏踏むむ炊炊爨爨とといいふふ家家のの

如此とて。この殺さるる夫の向小妾の内室の傍に彼処へ来りて。いと怖しき武夫の影を出て内室の切らまのへと入るより。身小副を逃歸りて。その秋狩不知り。其の来りて。媛君の志。その類未と語り。然るもその折よく。三草姓の来りて。媛君の志。然らば今も言る如く。太田の社へ赴くと決りて。主従三個人。終夜太田を行て歩み。安下某生再説陸奥。朝夷三義秀。脱小猛ハ異見不圖。越中へ。止め。一先。飯。城の民。道程遙隔。白澤。引。本街。武。兵の多。

少の軍勢屯を。朝夷。宿の主。親と曳。資。陸奥。地頭。張。漸く安堵の思ひ。平生の。吾。活計。義秀。

尾小屋と著て注進し我と叛逆謀叛の徒とのひまをこて安らね然らば
 是より葛西の陳へ往向ひて律の釈と逐一ふひ披を通過す若くは准依
 とす。獸六郎と猛八、俱不往んと乞けよと我一個あん律をばる人多勢
 却て宜しと制と頓てさちあまの葛西の陳不到す。清重自出逐ひ
 寒暖の移と速かくと清重のさす。足下先以陸奥の檢断使にして執られ
 しがあつ趣意を磐城時直阿武隈大夫との諸士と斬害す。このこ
 ろす。農民救まり集會嶺と推して傍若無人の挙動へこ逆心小
 疑ひあつと膽沢荊原との他の知縣が早歩の弛書の赴き外一因て
 地我とさう向らまを拒がむ然るもさるる人数もさすを帰糸の糸の林妙
 るまど。のるまど初踏擾不及をささるる仔細をさるる開の後会より後宜
 る言上あまをささるる在下等の爰不在りて足下と止め時宜す。防禦の一

做さんとするまを。餘のさあの共らず。據て今より後会足下が及るのよと
 公へ此れと通路の山下知小任さん旅店不在りてその細沙汰と族と下と
 けと朝夷謹と領掌。時直以下と斬害せり。深き仔細のあつとあれど
 証扱あつての叛逆をと誣せさん。朽惜く。その徒を生捕ありては是等の
 一と逐一洋進あつと憑る。旅店不飯り如此と。と猛八獸六の語り
 使とてと埃不翌日不到す。葛西の陳より。使節とて武士来り。義秀小對
 面とて。昨日足下がのさす。赴き領不言未及の所。廣元善信以下の老臣向
 注所小會合あり。衆評穿義せり。と。尙義秀異心あつと。や何れあり
 あつとも。先鎌倉へ去て。公裁と作ぐ。と。時直遠臣とりのを。と。軍
 家の股肱あり。討果を奈その意と。加之その坐不存あり。諸士と害刺へ
 波処と退く時。あつと。農民と集會隊伍と做し。その容軍陳の趣あり

心小叛逆ありしもの。その形小彰へきて。罪の免と雖も人固くその心後
 念入ての赦さす。但し証扱の爲拘むらる。者と生捕曳せ止。そと死
 縛の解意も。叛逆の有と知らまん固くその擒も。葛西の陳小受
 把て後念を送る。夫より執推の彼小於て擒むと鞫問し。やく般城時
 等。害せざるを罪と犯し。且義秀一点をる。非分ありとる。この分の
 當下小後念へ召さす。此より宜く執達を今と下知めていあり。素来小件
 の唐擒等。在下小通より。その準備小を難人等とも。召俱して。いと主人
 葛西清重。口証より演ふり。朝夷受て思ふ。この生捕等。時を小
 従来阿黨せしもの。右の如く。小の執推の彼小。この後のこと。小
 念む。然小あ。その命と取り。証扱とる。口と減。我と後。重。非。小。隆
 さん。小。較。計。る。小。了。好。智。小。閑。一。執。推。が。巧。小。の。畏。小。罹。らん。也。と。心。裡。小。冷

笑ひ。あま。不。念。を。て。い。る。等。の。証。の。解。を。執。達。あり。て。具。小。兼。諾。仕。つ。然。る。が。
 かの擒等。い。る。時。直。小。共。せ。族。其。坐。小。あ。つ。て。在。下。と。害。せ。ん。と。せ。者。あ。
 ある。ま。の。渠。等。の。と。口。口。と。せ。れ。鞫。問。あ。ら。ば。已。と。是。と。在。下。成。非。と
 ろ。す。一。然。る。ま。の。執。推。の。評。定。悉。皆。画。餅。あ。ら。ん。願。く。は。在。下。と。渠
 等。と。俱。小。口。口。と。せ。と。對。變。る。と。當。下。の。理。非。免。と。分。明。あ。ら。ん。然。る。が。
 不。於。て。在。下。と。汚。名。の。時。ま。せ。り。雪。ご。が。く。糾。問。小。あ。ら。ま。と。勞。煩。多。り。
 故。と。り。擒。の。と。進。ら。さん。の。不。便。あり。この。義。宜。く。言。上。あり。て。再。び。の
 左。右。と。族。ち。奉。る。と。あ。ん。ま。り。し。け。る。使。者。と。ま。と。兼。り。然。あ。ら。ば。その
 清。重。に。傳。ふ。べ。と。と。ち。歸。す。が。その。明。の。日。小。至。り。ま。二。人。の。使。者。未
 昨。日。返。答。の。赴。き。と。即。刻。言。上。せ。処。その。議。理。あ。ら。ふ。小。似。と。ま。と。脱。小。逆
 意。の。心。不。猜。あ。ら。ん。その。許。と。謙。念。へ。入。ら。ま。と。の。り。難。し。固。く。擒。の。と。召。し。



月夜八編六二

〇十九

葛西の使者
陸奥の掬を
遍与まゝと
談を



朝夷八編卷之五

獸六郎

まろ八

いひぢ

理非明白小紕こまごまとんと作ある処ところと拒こむ。その理ことつゞく。えぬを思おもふ小
 事こと比ひひひたた。猛者もうじやあるもへ人ひと會あ知しり。殊こと不たが渠ちるハ擒とらめ。ゆとありて
 其許そのこゝと鬼神おにあまのこゝ怖惶おそる故ゆゑ、ことと對たい支しるさら。渠ちるが理ことと威お威おとり。
 非ひとひ枉かる較計けうけいあるん。の議決ぎけつて赦しやうさらば。さらのこゝよく擒とらめ。渡わたさら
とありその逆さかえ脱だれた。十指じゆしゆのこゝひさひさひ知しる差ちがひを因より理非りひの礼れい
 断たり及および軍勢ぐんせいとさらむはけ。其許そのこゝと殊ことさらし。ゆゆと一点いっも逆さか心こゝろあるべ。はは後のちに仕し
 と擒とらめ。通とす。後の山沙汰さんさたとさす。返へん答たす。くく受う届とけ。時刻じこくと徒たららん
 復命ふくめいせよとと屬ぞくする命めいあり。さらの擒とらめ。速すみく通とす。さらの夫つまも。通とす。さらの
 のは返答へんたす。りりと詰つりけり。義秀ぎしゆははて諸老しよらう長ちやうが評議へうぎの結構けうこく奇き
 る威い威いとと非ひと理り不ふ枉かげ。人ひとと誣しゆる市井しきやうの俗しやくとと恥ちとせり。在下じやう
 苟なも和田義盛わだぎせいが三男さんなんめて救すくめ。ねど柳堂りゆうたうの近臣きんしん小擇せたくままさらる。一個いっの壯夫しやうふ

任意命じやういめいと徴ていするどどの罪科ざいことと犯とれたと。ゆゆと道みちとんと罪つみある人ひとと階かゝり
 がたたある。黒くろき心の義秀ぎしゆあるべ。老らう長ちやうが見差みさふのら。かかの山沙汰さんさたのこゝをい
 義盛ぎせいと姑こめ一族いちよく等らが。瑕瑾けあきんをいいる。因より在下じやう推おす。ままに披ひららん存ぞんすれ
 どもども強かく致ちままに命めい不ふ背はいするの恐おそとあり。還かへて不忠ふちゆうの名なとと人ひと終はるべ。微い
 后ごが愚存ぐぞんの。應おせせままにの命めいの重おもさらと惶おそる。擒とらめ。清重せいじゆうの。通と
 ぶぶとと然しかれれどもどもの擒とらめ。万命まんめい終はるべ。ままにの明あららむ道みちと失しふ
 故ゆゑ不ふ統と中ちゆうのこゝよく幼こす。恙やあるべ。と要えり。和殿わだんのこゝと意いひひて。朝あす
 手充てあてて做しる。若わかか今日けふを元もとする。擒とらめ。明日あした不慮ふりょのこゝと。倭わ者しやのこゝ
 為なりと思おもひん。の義ぎと克かつく執達しやくたつあるべ。と答こたへらるべ。葛西くわせいが使者しや。その
 意いひひあり。頓とん清重せいじゆう不ふ仕しへりて受う把へ不ふ来らず。その准じゆん依いとあり。ああを
 急いそに陳ちん所しよへ歸かへりゆ。その後のち影かげと人ひと送おくり。捕とらへられ。進しん出しゅつ大人おとなも倭わ者しやの悪巧あくかうと

粗き容子然る小邪也。権せりて。做えんとす。不敵がごとく。彼生捕送
 送りぬ。是を詮ぬるは。似たり。と。通ふあり。此方の理を却て非分の人做
 さま罪あるは。身不濡木と著る。心て必定あり。能令生捕と通ふ。其故不
 逆意あり。と軍勢を向ら。と。我も及ばざる。粉骨をて。扱ひぬ
 と。一命と。この状を。抱る。何条必と。あらん。理と。非分不階と。と
 と。安雨と。と。小埃後。不至り。一命と。失ふ。ろりの難ある。今軍兵。引
 りて。切死すと。執り。勝る。より。違ふ。と。約の。あ。と。後。せん。いと。易
 り。克と。思惟。一人と。義秀の。影。ち。成り。勇。面。彰。へ。ま。いと。憑。く。と。な。れ。の
 朝夷。と。拱。黙。と。義。の。感。ず。の。畢。竟。の。段。緯。長。く。と。の。編。の。説
 の。竭。の。第九編。不。精。く。鮮。へ。者。官。宜。く。發。兌。の。日。と。俟。候。の。あ。ら。と。希。ふ
 朝夷巡島記全傳第八編卷之五終

軍書小説類藏板月録

大塚心齋橋通
此久實寺刊

河内屋源七郎

楠二代軍物語

平賀の繪入

五冊

繪本雪鏡談

香蝶齋作
同前

十冊

楠正行戦功圖繪

本橋

十冊

同金花談

香蝶齋作
并画

十冊

楠公正行は正成卿の遺訓を守り南帝の所
為の忠も亦一變を待たず大敵を破る美談之

神功三端退治圖繪

貞吉の筆

五冊

同龜山話

同前

十冊

神功三端退治は上古の事、彈丸の如く難たれども
奮然とて之を退くは、一勝傳の如く、人の
容儀、易敷くぬれぬ、鬼女等の目も、恨まらば
難く、昔宮内へ事實を繪し、作者の筆

神功三端退治の事、一冊あり

九州諸將軍記

十二冊

同月宵部物語

真顔作

十冊

同忠孝二見浦

南堂亭著
柳齋畫香画

十冊

同顯勇録

同前

十冊

復讐言台見英雄録 初編 七冊

同 二編 七冊

同 三編 七冊

復讐言台見英雄録 第四輯 七冊

津海 三原主人
浪花銀格子書
石田五右衛門画

繪本誠忠傳 十冊

同 合邦辻 十冊

同 苔芽草紙 十冊

同 淺草靈驗記 十冊

同 忠孝美善録 十冊

同 彦山靈驗記 十冊

同 鴛鴦英草紙 十冊

同 金毘羅神靈記 十冊

祐天上人一代記圖會 六冊

葉死靈解脫物語 二冊

津海 三原主人
浪花銀格子書
石田五右衛門画

新累解脫物語 五冊

昔語質屋庫 五冊

同 中編 五冊

同 後編 五冊

欽比奈巡嶋記 卅冊

同 七編 五冊

同 八編 五冊

小栗外傳 十冊

繪本忠臣藏 十冊

同 後編 十冊

同 拾遺 十冊

同 畫本西游全傳 十冊

同 二編 十冊

同 三編 十冊

同 四編 十冊

曲亭馬琴著
書飾北齋画
曲亭馬琴著
書飾北齋画

小枝安兼
北齋画
手安兼水書畫
作同画
近利
南都大東屋書局

曲亭馬琴著
書飾北齋画
曲亭馬琴著
書飾北齋画

浪花銀格子書
石田五右衛門画
春曉齋作
同高
東籬亭主人編
春曉齋信画
遠水春曉齋作
同高

曲亭馬琴著
書飾北齋画
曲亭馬琴著
書飾北齋画

浪花銀格子書
石田五右衛門画
春曉齋作
同高
東籬亭主人編
春曉齋信画
遠水春曉齋作
同高

曲亭馬琴著
書飾北齋画
曲亭馬琴著
書飾北齋画

浪花銀格子書
石田五右衛門画
春曉齋作
同高
東籬亭主人編
春曉齋信画
遠水春曉齋作
同高

樹原 秋七種 曲亭主人述作

六冊 繪本那智白糸 蘭山書 北馬画 六冊

可憐久松の道世話 古今蘭朝の末の神童の
時ふり 忠臣義士の節義 蘭朝の
隆松 古主の興亡に巻く 蘭朝の末の神童の

同魁草紙 奇書三巻 五冊

石言選録 同前 臨齋北馬画

五冊 同奈古曾の蘭 風和亭書畫作 臨齋北馬画 五冊

月氷奇縁 同前

同平泉實記 遠水春曉齋 逸作 伴國畫 十二冊

金花夕映 撫暮里谷峨作 北馬画

五冊 同自來也説話 我和亭書畫作 十冊

孝子嫩物語 蘭山作

五冊 風流俄天狗 前編 後編 十冊

繪本夜船譚 遠水春曉齋作

六冊 同口之碑 臨齋北馬画 寺跡齋書畫作 五冊

復讐言初瀬物語 比明画 粟根亭書畫作

七冊 復讐言東物語 臨齋正吉画 六冊

紙治 楮生談 東海楼 寺跡齋書畫作

五冊 同安達ヶ原 臨齋正吉画 六冊

再開高臺梅 粟根亭書畫作

六冊 繪本白壁草紙 東海楼書畫作 六冊

見外白字巻 臨齋正吉画

五冊 通俗張山夢 遠水春曉齋 五冊

貧福太平記 春之書主人 保之画

三冊

開際筆記 頼齋正吉先生著

二冊

新田足利の外名將の事 臨齋正吉画

一冊

新田足利の外名將の事 臨齋正吉画

一冊

新田足利の外名將の事 臨齋正吉画

一冊

新田足利の外名將の事 臨齋正吉画

一冊

教訓部都言種 前編 全四冊
後編

森羅子の著作、大漢書の最後編、手山子
の書、墨田如川の書、のてたの實業書、
記正盛名臣の物語、藩生天知、のり、
能くを敬む、その用き、水、のり、
別手、のり、のり、のり、

雨月物語 上田武成著 五冊

桂林湯録 桂川中良先生著 二冊

好古博識和漢の雜書、流り、通筆、
大に、著、のり、のり、のり、

合戰評判

古戰評判

續古戰得失論

百家崎行傳 岳亭五郎著 五冊

士農工商と藩俗を論ずる、のり、
感、のり、
四十有九人の事、のり、
徳河村瑞軒、のり、
權實、のり、

續徳集 一冊 二冊

美作孝民傳 十冊

三條小鍛冶名録由来

昭代著聞集

太平記 片瀬名
大字 二冊

續太平記

書籍

文部省御蔵版翻刻書類學校用諸摺圖類
地球儀并詩作文類總三方今要用書類、格別
出精下直ニ奉差上候間多少ニ不限御用向
仰付被降度奉願候

大阪府下心車橋通本賣寺前川源七郎

06
10月21日

